－所蔵作品紹介－

山口　健智　YAMAGUCHI Kenchi

紙片など

しへんなど

作品データはこちら

山口健智は1921年旭川市生まれ。旭川中学校（現・旭川東高等学校）を病気で中退。療養中に西洋絵画に関心を持つようになり、やがて兄・正城を頼って大阪、京都で絵画を学ぶ。その後パリへ渡り、西洋絵画の技法をほぼ独学で身につけた。繊細な筆致の静物画を得意とし、当時のパリで高く評価された。

新収蔵となった本作は、パリのサロン・コンパレゾンに招待出品されたもの。本稿では、その画面構成に注目したい。

画面全体を大まかに見ると、重ねられた紙などの塊を成す形態と、マッチ棒、針などの線状の形態による構成と言えるだろう。特徴的なのは、紙などの塊に呼応するかのようなマッチ棒や針の配置である。次々と視線が誘われるように方向性、連続性をもち、同時にそれぞれが個として存在感を放ち得る絶妙な距離を保つ。これらの配置は相当緻密に計算されたものであろう。実際、健智は他にも切符とマッチ棒によるコンポジションを何作も手がけており、塊と線による構成にかなり興味を持っていたようだ。

ここで、当館で既に所蔵している兄・正城の作品を見てみよう。正城は紙にインクをつけ、へらのようにして描いた不定形な形態と、烏口(からすぐち)という道具で引いた線による作品を多く手がけた。ドイツのデザイン教育機関バウハウスの影響を強く受けていた正城は、線の長さ、間隔、方向などによって画面に生じるリズム、奥行、動きなどの効果を理論的に追求した。作品においては、不定形な形態を描いた画面に、線を配して秩序立てることで、効果的に構成しようと試みたのである。

塊と、それに呼応する線による構成。両者の作品には共通の関心を見出せる。当館はこれまで健智の作品を３点所蔵していたが、いずれも正城との関わりを見出せるものとは言い難かった。本作の収蔵により、兄弟の共通の関心が表れた作品がそろったのは、何とも感慨深い。

旭川美術館だより「氷華」No.57（2015.３発行）「収蔵作品から」より